

## 板碑遍歴六十年

石井真之助 著

近来、遺物遺跡の研究は、正にブームといつてよいが、その動向を見ると、新出史料の発見にのみ強い関心が向けられ、学史的な業歴を十分にふまえない傾向が見うけられる。中世の石造遺物研究などにおいても同様である。ここ数年前から特に活発にすすめられている中世の特異な形態の留意すべき石造遺物である板碑研究も、地域ごとに詳細な研究がなされるとともに、板碑の源流、性格の問題、さらには、その宗教史的意義など究明されつつあるが、このような研究を一層すすめていくためには、先学の業績を十分に認識し吸収しておくことが必須といわねばならない。このような時に、六十年の長きに亘って板碑研究を重ねてこられた方による本書の出版は、学界に裨益するところ大という常套贊辭をいうより、後進学徒の研究方法に対する頂門の一針といつてよい。

本書は、関東地方を中心に各地の板碑の優品を百五十基えらび、そのすぐれた柘影技術による柘本を年代順に配列し、且つ、それに解説を加えられたものである。板碑研究史を観ると、例えば『板碑概説』などの大著はなされているが、板碑の柘影をこれ程までに数多く、また克明に示された例はない。近時の遺物研究者の多くは、写真機器、フィルム等の進歩により、写真記録のみ

にたよるきらいがあるが、著者が序文でいわれているように、写真では至らぬ領域のあることを再認識しなければならぬ。判読しにくい造立年月日等の刻銘を柘本によって明らかにし、しかも縮尺でなく原寸大の記録を直ちにうることができるといった自明のことのほか、何よりも柘影の美は写真とは違ったすばらしいものであり、本書は、それを如実に示してくれている。

解説は、板碑の所在地、大きさ、状況、碑面の仏像、種子、造立年月日、造立趣意、偶文等の事項については勿論、克明に記されているが、調査、手栢行の状況を、紀行風に記されており、板碑のたつ風景を思いうかべておられたのしくよませてくれる。特に著者が序文でも述べておられるように、偶文の解説に力を入れられている。偶文は、仏教を研究する者以外には、なじみにくい難解なものであろうが、本書においては初心者にも理解されるよう実に平易に懇切に解説されている。六十年の蘊蓄を傾けたこの偶文研究は、板碑研究史の上で特記すべきものといえよう。高齢の著者がこのような大著をなされたことに心から敬意を表するとともに、本書をもととして、特に適切に加えられた偶文解説をよりどころとして、さらに板碑の仏教史的考察をすすめていくのは、後進研究者の責務であることを痛感して拙い紹介の筆をおく。(A4版、序文三頁、柘本図版一五〇頁、図版解説八九頁、四〇〇〇円、木耳社、昭和四十九年四月刊)。(堅田 修)

義門研究資料集成 別巻(二) 三木幸信編

本書は、義門研究資料集成(上)(中)(下)(別巻(一))に続くもの